

2010年 モスクワ大会 6月27日～7月2日 & 支部研究例会 6月5日 報告号

2010年6月27日から7月2日までモスクワにおいて開催された大会の報告と、第48回支部研究例会報告です。

<モスクワ大会報告>

藤堂雍子・・・p.1

山田晴通・・・p.7

荒川恒子・・・p.10

<支部研究例会報告>

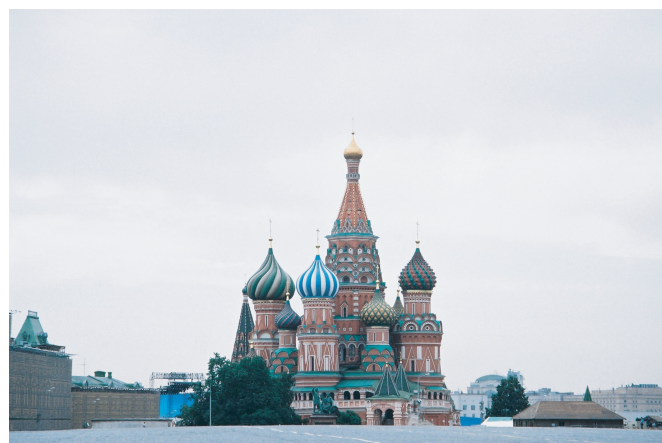
久保田慶一・・・p.13

IAML 2010 MOSCOW

藤堂雍子

出発直前に空港まで出迎え、宿舎まで送るという朗報がチャイコフスキー音楽院から飛び込んできた。到着翌日は地下鉄で市内下検分と観光（赤の広場周辺とプーシキン美術館フランス近代絵画）に充て、翌6月27日（日）オフの午前中に常連仲間に誘われ、カザンの聖母会堂の礼拝を見聞した。バスがすばらしい倍音で支える聖歌が会堂に満ち、司祭と聖歌隊の応唱の繰り返し、派手な色彩の建物外観とは対照的に、女性は白いスカーフを被り、会衆は二時間近く直立のまま腰を深く曲げ拝礼を繰り返すスピリチュアルな音楽の力を体感。

午後から、会議登録を済ませ、**カウンスル・ミーティング**に出席。参加者リストを会場で開きながら、回りを見渡すと、例年に比べ、カウンスル出席者が極端に少ない。会長自ら、参会者ひとりひとりに挨拶し気遣っているのも異例なこと。国別リストでロシア勢が多いのは当然だが、常連の特にアメリカ勢が少ないと気づく。ともかく、カウンスルの記録は木曜日（7月1日）と金曜日の総会での決定事項も含み、主要な議事を報



ワシリー聖堂

© y. t.

告しておこう。①選挙結果を総会前に確認：会長 R. フリューリ、副会長新任：A. ゴードン、J. エッケル、S. フラビア、留任：J. ラムブレヒト ②空席となる事務局長席に P. シェクター（現教育機関図書館座長）が名乗りを上げ、承認。③プログラム委員会新座長：S. フラビア。④課題であった会員名簿は、HP 内に電子化準備中。営利目的でこれを活用するには申請が必要だが、検索、ソート機能などが加わり、手元で個々に使える便利さが加わる予定。⑤電子ニューズレター編集長にカナダの B. マクミラン（既報）。彼は、2012年モントリオール会議を主催するマクギル大学音楽図書館勤務 ⑥次回選挙から電子投票開始に向け試行中。⑦2012年会費：団体会員 Euro64、個人会員 Euro38 となる（団体 2Euro、個人 1Euro 値上げ）。⑧2011年 IAML60 年を機に新しいロゴ募集 ⑨ P. トンプソンと V. ハイנטツに名誉会員称号授与。

夕刻から、RAPA 内で**オープニングセレモニー**。楽譜出版でその存在が知られている「ロシア作曲家同盟」からの祝辞もあった。会期中の発表や、見学の機会はなかったが、多くの古今ロシア作曲家の自筆譜を所蔵し、出版を手がけてきた実力ある団体だ。日本からの

参加は、荒川恒子氏、山田晴通夫妻と筆者。例年に比べると少ない。

28 日（月）**オープニングセッション**は、ヘッドライン情報。① F. リヴァ（伊）が国立の音楽アーカイブ計画があり、来年にはさらに詳細を報告ができると予告 ② J. ロバーツ（米）が、ニューグロヴ辞典新編集メンバーに、J.P. カサロが加わったことを報告 ③ M. ジャンティルテデツキ（伊）が、3 年毎の ISBD 改訂に際し、音楽資料について提案するためには、IAML からも IFLA を通じ積極的に関わるべきと提言。④ ロシア、とりわけモスクワとサンクトペテルスブルク（以下ペテルスブルクと略す）の主要音楽図書館やアーカイブの案内ビデオ上映。

研究図書館部会「ソース、演奏、音楽生活」①《ペテルスブルク国立図書館手稿楽譜コレクションの歴史から》（注 1）ロシアのみならず、国外の音楽家の 18 世紀～20 世紀の自筆譜、書簡、その他の手稿ドキュメントが充実している。これはロマノフ王朝時代の収集遺産で、西洋の大作作曲家たちのコレクション。ロシアの作曲者は、D.S. ボルトニャンスキー（ウクライナ）、グリムカ、A.S. ダルゴムイズスキー、ムソルグスキー、リムスキーコルサコフ、プロコフィエフ、ショスタコヴィッチほかの手稿資料が多く、ロシア人愛好家や評論家、演奏家たちの貢献で、コレクション形成された。収集家の名を冠したデジタルコレクション目録で参照できる。②《ロシアにおける H. ヴィエニャスキー（以下 H.W.）の演奏会》をレポートしたのは、ポーランド・ヤギロニアン大学の研究者（注 2）で、ロシアでの演奏会評を焦点におき、この地で客死した作曲家、かつ 19 世紀を代表するヴァイオリニストの H.W. の実像を明らかにした。早くにパリで学び、米国やヨーロッパ各地に演奏旅行に出かけ、ペテルスブルクで活躍し、後にベルギーで教えたポーランド生まれの H.W. の演奏スタイルとテクニカルな観点、ロシアでの受容について論述。③英国立図書館 (BL) の R. リッジウェルは《交流演奏会プログラムと Breitkopf und Hartel : その文化交流策 1893-1941》の概要報告。演奏会プログラムやパンフレットなど、もともと長期保存を前提としない資料研究は、2003 年以降、IAML 書誌委員会に作業グループが設けられている。報告者は当初からそ

の座長である（注 3）。19 世紀末から 20 世紀前半第二次大戦以前の初期録音の時代から商業録音や放送時代に至る先駆けとなった。同じプログラムを使って各地で催されたコンサートツアーは、ライブツィヒにあった B & H 社が 1893 年に始め、新しく出版された楽譜のプロモート、販売の拡大を意図しており、社会の大きな変化を反映している。ヨーロッパ圏、北米のみならずロシアや日本でも演奏会は開催された。

著作権委員会は、新座長 H. フォークナー初めてのセッションで《Fr. ディーリアスの音楽における著作権：複雑さのケーススタディ》を自身で例示することから始めた。以前 BBC オーケストラ・ライブラリアンであった彼女は、現在、R. ヴォーン・ウィリアムス・トラスト（注 4）の事務長。ディーリアスの個々の作品を縦軸に初版、遺作（没後出版）、出版者、英国の著作権保護期間（没年 +70 年）、EU の保護期間、米国の保護期間を横軸にして、個々作品の行に書かれた保護期間年を記載した配布資料をみると、遺作の保護期間が英国では（没年 +50 年）加算年が他とは異なる。ディーリアスが滞在し作品を生み出したフロリダ、すなわち米国では、算定基点となる年（著作権登録年 +95 年）が異なり、著作権登録年更新も存在し、遺作となると未登録作品もあるので著作権満了年は英国、EU に比較するとさらに延長される計算となり、事情はとて複雑になっている。国際法に収斂させることの是非を投げかける事例だ。

各国支部の報告を一堂に集めたが、詳細は本部電子レター（注 5）や HP（注 6）などでも、近々原文をご覧いただける筈なので個々の報告は省略するが、後進の教育、そして目下の経済情勢による縮小予算の中で、電子化や新たな企画を進めることの困難さに言及している支部が多くなっていると司会の会長 M. セヴェールがコメントしていた。今の音楽図書館が陥っている困難は、日本固有の問題だと思ってしまうことは、むしろ独りよがり、脱出する方法は一様ではないかもしれないし、その時期も揃ってとはいかないだろう。しかし経済連鎖と同じく、音楽文化のインフラストラクチャーを支える構造もまた、世界と関わりなく解決することはないだろう。

29 日（火）「IAML の将来」を全体会議で、というプ

ログラムは昨年の総会で約束され、大会前に M. フィンガーフットが自身の見解をメーリングリスト（以下 ML 注 7）で出し、中堅を中心にやりとりが始まっていたが、創設当時の会員である研究者が設立時の IAML の目的について、電子化時代の情報学用語で置き換えられていることに違和感があったようで、異議を発し、議論の方向がすり替わってしまったままであった。モスクワ会議では、予定の司会者不在で、Power point を預かった代行が進行を引き受けたが意見が羅列されたまま時間切れとなった。IAML の構造やコミュニケーション手段などについての意見が会議後も ML で熱心にやりとりされている。

アーカイヴ・ドキュメンテーションセンター部会の「外国にあるロシア・コレクション」は、①《パリオペラ座博物館所蔵のロシアバレエ団関連コレクションについて》M. オークレールの発表。B. コフノ（注 8）の所蔵していた一連のドキュメントを 1975 年国立図書館（以下 BN）が購入したことから始まり、1979 年にディアギレフとロシアバレエ団展を BN で催した。その舞台音楽に関わる静止画像コレクションは、近代フランス作曲家やストラヴィンスキーなど当時のフランス音楽界に多大なセンセーションを与えた遺産である。フランス国立図書館 OPAC には、Gallica と称すデジタル画像目録を含むが、現段階では、著作権上、デジタル画像登録は全部ではないのが残念だ。2009 年にはロシアバレエ団 100 年を記念して、多くの機関がイベントを設け、英国、米国でも同テーマでコレクション公開の機会があった。リサーチを重ねた結果のセッション発表は、初公開のものも少なくないと思われるヴィヴィッドなコレクション紹介で、何より目に雄弁であった。②リヨン音楽院図書館 Ch. クリロフによる《N. ブーランジェと音楽院所蔵のロシア出版楽譜》。N. ブーランジェ（以下 N. B. リリーとナディア姉妹の母 R. ミシュツキは、ロシア貴族）は、作曲家、指揮者、影響力のある音楽教育者として、ロシアの作曲家、演奏家たちとも多くの交流があった。その交流の結実として、ロシア出版楽譜（P. Jurgenson, V. Bessel, P. Belaieff, Ed. Russe de Musique, Muzgiz, Muzyka）を受贈、後にこれらがリヨン音楽院図書館に寄託された。③BN の P. ジラルールは、《BN 所蔵のロシア音楽資料について》、BN 音楽部門長である C. マシップが 2006 年 Fontes に

著した記事（注 9）以降も、コレクションは増えており、書簡類のほか（注 10）、モンパンシェ・コレクション（注 11）にも新たな発見があると述べた。④IRCAM の M. フィンガーフットは、《モスクワとのコネクション》と題し、IRCAM がストラヴィンスキー広場に在るというだけでなく、30 年も前から、1920 年代定期刊行物“ソヴィエト音楽”に掲載された 20 世紀初頭の象徴主義を経てロマン主義からスクリャピンとその仲間たちによって表象され、近代音楽に向かって変遷する作品群を IRCAM 演奏会で取り上げており、ロシア、アルメニア、ベラルーシ、エストニア、ラトヴィア、タジキスタン、ウクライナに関心をもち、接触し続けてきたと述べた。

研究図書館部会とプログラム委員会「文化、コレクション、社会」 ①《ロシア国立図書館における歴史的及び文化的環境での音楽関連手稿資料》について、G. ティモシユチェンコワの発表。音楽資料は、ロシア国立図書館と手稿楽譜を管理している特殊手稿部門に分散しており、各々初期手稿書と最近の手稿楽譜が対象となる。前者の歴史は古く、スラヴと広義のロシアの総体を指し、アーカイヴとして最古典籍に属する聖歌集などを含み、書籍文化のモニュメントとしての価値がある。後者は、著作者が確立している時代の手稿楽譜を指し、個々の著作研究の領域に貢献する資料である。両者には、手稿研究法としても明確な線引きが存在するので別管理になっている。②《Utile Dulci Society のコレクション》の報告者は、ストックホルムの音楽専門公共図書館の V. ハイイツ。1766 年に設立された音楽と文芸を核としたアマチュア文化団体だが、宮廷オーケストラメンバーも加わり定期演奏会を開催した文化団体の活動を説き、当時のスウェーデンに音楽家専門教育が欠落していることが度々問題視され、1771 年グスタフ三世によって王立音楽アカデミーが設立された。アカデミー図書館に音楽コレクションを寄贈したのは他ならぬこの Society であった。後期バロックと初期古典派の管弦楽・室内楽コレクションで、Society 名の蔵書印も写されデジタル化され、貴重な 18 世紀楽譜コレクションとして役立っている。

30 日（水）**サーヴィスとトレーニング委員会合同セッション「メタデータ、音楽、認識」** ①《音楽学メ

タデータを統合する‘musicSpace’プロジェクト》について D. ブレザートン（英国サウスハンプトン大学）の発表。筆者は、抄訳できるほどの認知工学の語彙が不足しているので、関心のある読者は、デジタル抄論を直接ご覧いただく（注 12）。このプロジェクトには、データ提供パートナーとして、New Grove online, RILM, RISM や英国立図書館ほかの名前が挙げられている。②ペテルスブルクの国立図書館から登壇した I. ベツグローヴァは、《ロシア国立図書館音楽部門》概要を解説。1815 年にその収集の基礎である納本制度が形成され、外国の音楽資料も収集。1959 年以降、選別された録音資料収集がこれに加わり、2004 年になって納本制度対象となった。課題は、ユニークなコレクション所蔵にかかわらず、利用スペースが減少し、インターネット設備の拡大、複写への対応と相容れなくなっている。利用が減少し文化レベルの低下も進んでいるという深刻な問題にも直面している。その一方で、18 世紀～20 世紀のロシア音楽の総合目録プロジェクトが 1990 年代から始まっており、2005 年から伝統的で貴重なコレクションのデジタル化推進が開始され、音楽学や伝統音楽研究の進展の契機となっている。これら二つのプロジェクトの実現に向かって、旧帝政時代、旧ソヴィエト共産圏時代の国々との 70 を越す協力体制の計画もあると報告された。③英国トリニティ・カレッジの C. キドウェル《認識への道：学生をサポートし、教育をプロモートする》。英国の高等教育「専門基準構想」(PSF) に関する活動とその中核となる基礎知識と「専門」の意味について紹介し、高等教育アカデミー (HEA) での自身の経験を踏まえ、情報リテラシー領域で実践しているポイントを列挙した（注 13）。

音楽教育機関図書館部会では「**舞踏への勧誘：EC 高等教育音楽院協力体制 (AEC) と IAML 音楽教育図書館部会の将来**」EC による高等教育機関改正をまとめたボローニャ・プロセスのさらなる進展の中、ヨーロッパの個々の音楽院がどう向き合うべきかが近年の差し迫った音楽院の課題だ。①ヨーロッパ音楽院協会会長でストックホルム王立音楽院副学長（理事）J. ヨハンソンを迎え、《2010 年以降、ボローニャに何が起こるか？》と題し、今年、多くの国で「音楽院」も高等教育機関として組み込み、認可システムや、学力評価システムが標準化されるだろう、加えて音楽院分野でも、

研究機能や博士課程、雇用や高等教育機関への進学準備のトレーニングについて、標準化が進むことになるだろうと説明した。②ブリュッセル王立音楽院の J. エッケルーは《音楽教育機関図書館と芸術的リサーチ：図書館の限界を超えて》と題し、③ヨーテボリ大学音楽・舞踊学部図書館の P. シェクターも、《音楽情報リテラシー：音楽図書館の挑戦》と題し、以下のような困惑を述べていた。1999 年ボローニャ・プロセスの目的はヨーロッパの高等音楽教育で取得課程 (degree) の標準化を図り、互換性を獲得することであった。アカデミックな取得課程をこれまでとは異質の努力をして獲得しなければならず、美術や音楽の専門教育機関での「リサーチ」とはどんなタイプのものか、「芸術的リサーチ」とは何かを定義しなければならない。音楽図書館の役割にも重要な影響をもたらす筈だが、一般の学術リサーチのような体系化はされておらず、ライブラリアンにとって悩ましい課題で、「芸術的リサーチ」と称している内容をもっと検討する必要があるだろう、と述べている（日本語のボローニャ・プロセス解説は以下参照 注 14）。

エクスカション「モスクワの音楽生活」は、ボリショイ劇場や、モスクワ芸術劇場を始めとした数々の劇場の立ち並ぶ地域を市内散策し、作曲家の名を冠した「グリニカ音楽博物館」に到着した（グリニカの資料博物館ではない）。楽器博物館も兼ね、ロシアの名だたる作曲家、演奏家のモニュメントを展示し、その手法はあまり近代的とは言えないが、ここでしか見ることのできない肖像画や、写真、舞台作品の模型や、初版楽譜に出会えた。楽器は、中央アジア、東アジアに及ぶ地理的、歴史的に広い領域のロシアが、楽器の宝庫でもあることを垣間見ることができた。後半は、資料室で、自筆譜や初版の楽譜を二人の学者と学芸員の解説付きで自由に閲覧できた。ドビュシーの連弾用に作曲されたアレグロの自筆譜（未刊の交響曲ロ短調の一部として書かれた）に出会えたことは、この日の予期せぬ収穫だった。チャイコフスキーのパトロン、v. メック夫人に招かれて、ロシアを訪れた若き作曲家がこの地に残していった自筆譜で、帰国してから手元の作品目録、既刊の全集や出版譜で確認したところによると、保管場所こそ移っていたが、実物に相違なかった。



グリンカ音楽博物館の資料室で

© t. a.

7月1日(木) **RISM 委員会**は、近日中に Series A/II Music manuscripts after 1600 のデジタル DB のオンラインサービスを無料化すると RISM 本部 K. カイル博士の宣言があった。彼によれば、バイエルン国立図書館、ベルリン国立図書館、マイントの Akademie der Wissenschaft und der Literature との共同体制で新しく OPAC を立ちあげ、シリーズ A/II をまず無料化し、次にシリーズ A/I も CD-ROM が今年 12 月に登場予定。RISM 事務所設立 50 年を記念して新たな段階を迎えることになる(ロゴも新設)。新 RISM OPAC の詳細は HP も参照されたい(注 15)。ハンガリー国立図書館音楽部門から今会議初参加した B. ミクジは、ハンガリー RISM が出版した《Per astra ad aspera 苦難を超えて栄光へ》を紹介。ドレスデンとミュンヘンで作業をしているドイツ RISM の W. フリューハウフによる RISM ドイツ支部報告も興味深いものであった。

書誌委員会とプログラム委員会合同で「音楽図書館：出版と遺産」

①アルカンジェルスコエ博物館エステートから、N. ドゾロヴァと K. ボレンコの二人の学芸員が、18 世紀後半から 19 世紀初頭収集の《N. B. ユスポフの音楽コレクション》紹介で、富裕な貴族で卓越した美術鑑定家により形成された劇場と音楽関連文学中心のコレクション。仏伊露語のリブレットを含む。現在は国立図書館の文庫として保管されている。②《チャイコフスキーの生涯と作品に捧げられた出版 1999-2009》は、クリンにある国立チャイコフスキー博物館学芸員 G. ベロノヴィッチ発表。内外の研究者にとって重要な一次資料をもつ最大のコレクションを所蔵する。ミュージアムはこれらをプロモートし、

チャイコフスキー新全集、主題目録・書誌文献目録、チャイコフスキー百科事典(2011 年出版予定)等々、ロシアと出版社 Shott との共同出版にも寄与してきた。自筆譜ファクシミリ版や写真集を刊行中、v. メック夫人との書簡集が今年 4 巻目を出版し完了する。③《カレリアの音楽遺産：研究、保存、利用》は、フィンランド東部に隣接するカレリア共和国(ロシアの北西連邦管区、首都ペトロザヴォーツク)国立図書館のシャラクヘヴァ学芸員が発表。音楽文献部門の主たる活動として、カレリアの音楽遺産の保存とアクセスを提供すること、1927 年以降 2005 年に至る作曲家自筆譜や音楽家の楽譜を編纂・索引化も実施、2002 年以来、録音資料の研究が進みこれも索引化完了している。現在 CD と DVD の録音プロジェクトがあり、音の採取と同時に、関係者からの聴き取りも計画されている。

7月2日(金) 音楽教育機関図書館部会・サービスとトレーニング委員会合同セッションは「機械化、教育、保存」

①モスクワ音楽院(旧チャイコフスキー音楽院)図書館は、機械化に直面した最近の動向を《情報の機械化と音楽研究と学習過程に向けた図書館サービス：経験と課題、そして実施》を、最新目録に挑戦中であると述べた。②ペテルスブルク音楽院(旧リムスキーコルサコフ音楽院)は、2009 年に創設 180 周年記念を祝ったばかりのロシア最古の音楽院だが、同地の王立ロシア音楽協会も 150 周年記念年であり、この二つを創設した A. ルビンシュタインのロシアの音楽教育への多大な貢献について強調した。③《現代社会におけるドンコサックの伝統音楽》(ロストフ国立音楽院：旧ラフマニノフ音楽院)(注 16)、及び④《シベリアの古き音楽文化の保存と研究》(ノヴォシビルスク国立音楽院：旧グリンカ音楽院)(注 17)は、地方伝統音楽の保存について紹介した。最終日のこの日は、総会と閉会セッションに入り(冒頭のカウンシル報告でまとめて記載済み)、来年のアイランド・ダブリン会議に向けた紹介ビデオが流され(URL は注 18 参照)、**フェアウェル・ディナー**だけを残し、全会議日程を終えた。

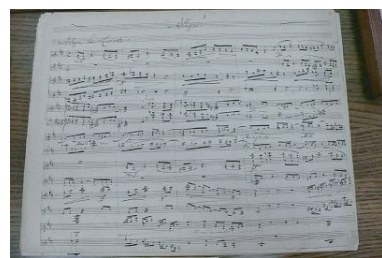
注

- 1 Natalia Ramazamova サンクトペテルスブルの国立図書館 Ms 担当者が発表。
<http://www.nlr.ru/eng/coll/manuscripts/music.html>
 - Sukhtelen, P i o t r komilevich, 1751-1836 スウェーデン駐在ロシア大使で収集家
 - Vaksel, Platon Lvovich 19 世紀ロシアの収集家、音楽評論家
 - Ziloti, Aleksandra, 1863-1945 ウクライナ出身 シロティあるいはジローティ。ピアニスト、作曲家、編曲、指揮者として知られ、ラフマニノフにピアノを教えた。
 - Stasov, V. V. ロシアの美術・音楽評論家。指導的な芸術家たちとの文通で知られる
- 2 Rena Suchowiejko 研究者
- 3 WG のレジユメは下記参照
http://www.iaml.info/en/activities/projects/access_to_performance_ephemera/
- 4 RVW トラスト：英国の 20 世紀以降の英国現代作曲家振興委託財団。若い作曲家への奨学金制度もある。設立者 R. V. W. の名が冠されている。理事名簿には BL の OB の名前もある。
- 5 <http://www.iaml.info/publications/newsletter/IAML-NL-3435.pdf>
- 6 Fontes Artis Musicae v. 57-4 掲載予定
- 7 http://www.iaml.info/en/organization/committees/programme/future_of_iaml
- 8 Boris Kochno (1904-1990) ロシアバレエの台本作家、ディアギレフ、シマノフスキーの友人、後にフランス国籍を取得したが、ロシア出身。
- 9 Russian archives in the collections of the music
- 10 以下の音楽関係者ドキュメントが加わった。
 - Georges Gortchakoff, 1 9 0 2 – 1 9 9 5 プロコフィエフの側にいた人物、詩人。
 - F y o d o r Akimenko, 1876-1945 パリ没 ウクライナ出身の作曲家。ストラヴィンスキーに、ペテルスブルク音楽院で最初に音楽理論を教えた。
 - Myakovsky, Nicolai, 1881-1950 作曲家
- 11 Fonds Montpensier モンパンシエは、パリのパレロワイヤル庭園に近接し、リシュリュ通りの内側に並行している通りの名前で、音楽評論家 Robert Brussel (1874-1940) による、两大戦間の音楽関連切り抜き記事や、書簡のコレクション等を指す。彼の主宰した L' association française d' expansion et d' échanges artistiques は、この通りの 8 番地に住所をおいていた。
- 12 <http://www.en.scientificcommons.org/51583696>
 Discovery and exploration using musicSpace (2009)/ David Bretherton et al.
- 13 <http://www.slideshare.net/kidwell125/road-to-recognition> 発表のパワーポイント収録
- 14 ヨーロッパ高等教育の課題：ポローニャ・プロセスの進展状況を中心として / 木戸裕
http://www.ndl.go.jp/jp/data/publication/refer/200808_691/069101.pdf 参照
- 15 <http://opac.rism.info/index.php?id=2&L=1>
- 16 ロストフはクリミア半島の根元にあり、広大なドンコサック軍活動の最西南にある。
- 17 ノヴォシビルスクは、東西に走るシベリア鉄道のほぼ真ん中、シベリア西部に位置する。
- 18 http://www.iaml.info/iaml-uk-ird/dublin_2011/index.html



パシコフ・ドム
© h. y.

(とうどうやすこ 副支部長・代表参加者)



Musee Glinka/Debussy
© y. t.

IAML モスクワ大会に参加して

山田晴通

本来、図書館司書でも、音楽学者でもない私が IAML に参加することになったのは、今から7年近く前に、RILM 日本国内委員会に関わってほしいと松下鈞さんから依頼されたのがきっかけだった。当時、RILM では、ポピュラー音楽関係の採録を強化したいという考えがあり、日本ポピュラー音楽学会（JASPM）で松下さんと多少のご縁があった私に声がかかったという経緯だった。こうして2004年以来、IAML から選出される形でRILMの仕事に関わってきたが、正直なところ IAML については、その何たるかを十分に理解しないまま、幽霊会員状態が続いていた。RILM 日本国内委員会の仕事には、しばしば欠席しながらも年数回は参加してきたが、IAML 日本支部の研究会には数年に一度も参加しないという体たらくであった。

そんな状態の中で、思いがけず、IAML モスクワ大会で日本のポピュラー音楽事情について報告をしてほしいという依頼が春先にやってきた。幸い、勤務校から旅費等の支援を得られる見込みがあったので、またとない機会と考え、参加することにした。報告の下敷きに出来そうな内容は、ここ数年来、授業の中で取り上げてきたが、正味30分足らずという限られた時間で



会場 RAPA

© h. y.

英語の報告をするとなると、やはりいろいろ無理が出てくる。言葉足らずを承知で、かなり強引なまとめ方で百年以上の歴史を総括する報告の予稿を送り、さらに4月から6月にかけて、授業の合間を縫って読み上げ原稿を準備した。

今回の出張は、はじめての IAML 大会への参加というだけでなく、私にとっては初めてのロシア行きであり、事前の準備でもまごついたり、いろいろな方々にご迷惑をおかけすることがあった。普段の海外渡航では、航空券は早めにとっても、宿は余り事前に抑ええないのがいつものことなので、つついのんびり構えていたのだが、ビザが厳しいロシアに関してはそうはいかないと藤堂雍子さんにメールと電話で促されて、ようやく旅の手配をはじめるという状態だった。しかも、今回は家内も連れて行くこととなり、今大会に日本から参加した藤堂さんや、荒川恒子先生には、何から何までご配慮をいただくばかりであった。

実際に渡航し、大会が始まってからは、大会運営の微妙な不手際に時に戸惑いながら、また、外食その他モスクワの物価の高さに閉口しながら、それでも何とか日程をこなしていった。今回の大会日程は6月27日（日）から7月2日（金）までだったが、初日は受付と式典が中心で、月曜日から各種の発表が行われ、私が報告することになっていた公共図書館部会のセッションは火曜日だった。この絶妙な日程のおかげで、月曜日に他の発表の様子を見て雰囲気をつかみ、火曜日に自分の報告をさっさと済ませ、その後は心置きなく大会行事を有意義に楽しむことができた。というわけで、以下では、まず自分にとって印象深かった発表や議論を、大会日程の順序に従っていくつか紹介し、最後に、自分がどんな報告をしたのか、概要をご紹介します。参加報告の責を果たしたい。

まず、初日の27日（日）には、受付を済ませた後は、役員会などはあるものの、一般参加者向けには開会の式典くらいしかプログラムは無い。開会式の後には、混声合唱があり、ロシアの伝統的な作風のものからモダンなものまで多様な曲を取り上げ、曲ごとに歌手が立ち位置を変えるという工夫も見せながら、大いに楽しませてくれた。

実質的な研究発表がはじまった28日（月）には、オー

プニング・セッションに次いで行われた 11 時からのセッションで聞いた、オーストラリア・メルボルン大学の女性司書による発表が、大変印象に残った。内容は、19 世紀オーストラリアの裕福な家庭婦人で、後年オーストラリアにおける女流画家の先駆として評価されるに至った女性が、自分の気に入った楽曲を手書きで写譜して構成した楽譜集の内容分析である。当時のオーストラリアはヨーロッパ文化圏の辺境であり、その社会において裕福な境遇の中で文化的エリートたりえた人々が、どのようにヨーロッパ（あるいは英本国）の音楽文化を摂取していたかという観点と、一定の芸術的才能に恵まれながら、それを職業とすることも公の場で披露することもできなかった当時の有閑階級婦人の立場に向けられたジェンダー論的視点が、議論に立体的な奥行きを与えていた。次いで、同じ時間帯に別会場へ移って聞いた大英図書館の男性司書による、19 世紀末から 20 世紀初頭に刊行されていた演奏会プログラムのリプリント誌についての報告は、不勉強でそもそもそのようなメディアが存在していたことも知らなかった者としては大いに勉強になったし、その調査手法が専門図書館のネットワークを生かしたものであったことも IAML らしい報告だと感じた。午後の著作権委員会のセッションでは、女性委員長による、英国の作曲家ディーリアス（1862-1934）を具体例にした長めの報告を聞き、改めて、国ごとに複雑な状態になっている著作権の適切な処理の困難さを再認識させられた。また研究発表ではないが、午後遅くのセッションで行われた各国支部の状況報告の中で日本からの報告に立った藤堂さんが、日本近代音楽館の閉鎖について時間を割いて説明されていたことも印象的であった。

29 日（火）の朝は、直後の自分の報告のことで頭がいっぱいという状態で、自分の報告と同じ会場で行われていたプレナリー・セッションへ行った。ここでは、正直なところ十分に議論をフォローできなかったのだが、現在の IAML が、情報化への対応、各国における図書館組織の再編合理化への対応、世代交代といった課題を抱えていることを、はっきりと認識できた。自分の報告は、午前中後半に行われた公共図書館部会のセッションの 3 本の報告の最後だったが、自分の報告の直前に行われた、パリ音楽資料館の女性司書

の報告も、大変興味深く、印象に残るものだった。所属館の収蔵品によりながらシャンソンの歴史を辿るといふ企画展の経験を踏まえた報告だったが、特に印象深かったのは、彼女が英語で報告したことと、同館のシャンソン関係の収蔵品の中核に日本人が寄贈したコレクションがあるという点であった。IAML は英独仏はじめヨーロッパ諸語による報告を認めているが、英語で報告した方がより広い聞き手にメッセージが届く可能性があることは言うまでもない。もちろん、特定の作曲家に言及する場合などには、専門家同士でより深い議論をするためにそれぞれ適切な言語を用いるべきときもある（帰国後に樋口隆一先生にうかがったところ、やはりテーマによって英独語を使い分けられるということだった）。シャンソンについての報告を敢えて英語で行ったという姿勢は、ポピュラー音楽につながるテーマを集めたセッションの趣旨をよく汲み取るものであったと思ったし、説明もわかりやすいものだった。もう一つ驚かされたのは、同館のシャンソン関係資料の中核に「薮内コレクション」が置かれているという事実であった。これまた不勉強で、全く承知していないことであった。このコレクションの寄贈者である薮内久は、日本でシャンソンが最もポピュラリティーを持っていた時代を生きた熱心な愛好者であり、『シャンソンのアーティストたち』（1993）という貴重な参考図書を残している。そのコレクションがシャンソンの母国フランスで専門図書館の中核コレクションとなっているという事実には感動を覚えたが、同時に、これが日本に残らなかったことをどう理解すべきか、複雑な思いにもなった。午後は、モスクワ市内北部のボゴリユゴフ芸術図書館を見学し、さらに夕方には、国立図書館の一角にあるパシュコフ・ドムという古い邸宅の一部を利用したホールで、古楽器アンサンブル「プラトゥム・インテグルム・オーケストラ」を鑑賞した。

30 日（水）朝は、RILM の実務会議があった。今回は RILM 日本国内委員会からは他に参加者がいない状態なので、RILM の全体像も余りよく分かっていないまま、とりあえず議論に参加した。この後に出た音楽教育機関図書館部会のセッションは、こちらの理解力の不足で、印象に残る発表には出会えなかった。午後のエクスカージョンは、一般的な観光として赤の広場周

辺やクレムリンを見学した後、国立図書館音楽部門を丁寧案内してくれた。ここでは、あちこち思わぬところで日本盤レコードを目にした。

7月1日(木)午前の最初は、放送・オーケストラ部会のセッション出たが、やはりかなり難しく、英語以外でのやり取りも多くて理解できず。座席も途中退出できない長椅子式で、かなりしんどかった。体調の問題もあったが、午後の後半と午後のセッションは専門性が高くてついていけないと判断し、あっさりギブアップした。夕方からは、モスクワ音楽院の図書館音見学と、小ホールでの演奏会に参加した。演奏会の演目は前衛作品ばかりだったが、ユーモラスな作品もあり、けっこう楽しめた。

最終日の2日(金)午前は、前半で民族音楽学の録音記録の蓄積をデジタル・データ化する話と、保存媒体としてのCDの耐久実験の報告を聞くが、さして印象に残らなかった。後半は、研究図書館部会のセッションに参加したが、このセッションは総じて今大会で最も印象深いセッションであった。最初に南デンマーク大学の新しい民族音楽専門図書館の話が同館の男性司書から報告されたが、これは分かりやすい発表だったものの特段の感銘は受けなかった。次いで、エストニア国立博物館の女性司書が、エストニア出身で、帝政期ロシアで最も成功した楽譜出版事業者P・J・ヨルゲンセン(1836-1904)の軌跡を、同館の蔵書を通して検討するという報告があり、大変興味深く聞いた。ヨルゲンセンの事業はソ連時代のメロディアに繋がったそうだが、個人についての情報はロシア語で伝記が出ているものの、英語で読める資料はまだ限られており、貴重な報告を聞けたと思う。セッションの最後は、ウィーン市立図書館の男性司書が、オーストリアの軽音楽系の作曲家ルードヴィヒ・グルーバー(1874-1964)が第一次世界大戦の捕虜としてシベリアにいた時期の音楽活動を、同館蔵のグルーバーの個人文書などを用いて追った報告で、これまた大変興味深く聞くことができた。このセッションでは、IAMLの醍醐味を味わった感じがした。午後の総会にも参加したが、議事は滞りなく進行し、最後に次回開催地であるダブリンの紹介ビデオが上映され、日程が全て終了した(この日の晩餐会は、予算の関係もあり欠席した)。

以上、全日程の経験を通して、IAMLの本質の一端に

触れ、浅薄だった理解が一挙に深められたように思う。また、こうした経験は、本来なら30代くらいまでに第一歩を踏み出しておくべきであろうとも感じた。その意味では、今回大会への日本からの参加状況は、人数、世代ともに課題があったと言わざるを得ない。



発表中の山田晴通氏

© h.y.

さて、後回しにしておいたが、私自身の報告は、洋楽導入期以降の日本のポピュラー音楽の歴史を30分足らずで説明するという極めて乱暴なものであった。出席者もさほど多くはない会場で、プレッシャーもあまり感じなかったが、ひとたび話し始めると後は夢中で原稿を読み、パワーポイントを操作した。

この発表では、明治期以降の日本が、それぞれの時期に様々な形態の西洋音楽を導入しながら、それが日本独自の形態に風土化して定着し、そうした層が積み上げられて現在のポピュラー音楽文化の形成に至る、というモチーフを提示した上で、まず、伊澤修二やメイソンによる教育の場への洋楽導入とヨナ抜き五音階の成立を説明し、次いで、1903年のガイズバーグ録音など初期録音に言及し、民謡概念の導入と民謡の収集・整備→新民謡の創作→流行歌という流れを示した。さらに、より直接的な西洋音楽の導入の試みとして、浅草オペラの折衷的な性格を指摘し、関東大震災後のレコード業界の再編成と5社体制の成立によって、新民謡→流行歌と並んで、アメリカやヨーロッパのポピュラー楽曲など洋楽の翻案導入が重要になったことを説明した。その後、戦時体制下では洋楽が禁圧されたが、戦後占領期には米軍関係の音楽需要などを契機に、大きな揺り戻しがあり、日本のミュージシャンたちの間に洋楽が浸透するとともに、やがて高度成長期の国内

市場の拡大という状況の中で洋楽で鍛えられたミュージシャンたちの演奏が、日本人のポピュラー音楽に対する審美観を形成していったと考えられることを示した。さらに、ロックンロールとフォークソングのそれぞれの導入期において、洋楽由来の概念が、意味のズレを抱え込みながら日本語の中に定着していった過程についても簡単に言及した。結びには、日本に風土化した洋楽由来の音楽が、元々の洋楽とも異なる日本独自のものとして、他国の音楽文化に何らかの影響を与えるような可能性は開かれているのか、という問いを置き、報告を閉じた。

聴く側の人数は少なかったし、質問もさほどでなかったのだが、セッションの終了後に、報告内容についてというよりも、日本の音楽に関心がある人たちにいろいろ質問をされ、一生懸命に答えた。また、後で会場内を歩いていて、すれ違った（こちらは誰だか認識していない）参加者に「いい発表だったよ」と声をかけられることが2回ほどあったので、そこそこの発表にはなっていたのではないかと思っている。ただし、この発表を補強した完成原稿を8月の締切までに送ることは出来なかったもので、FONTESにはこの報告のフルペーパーは掲載されない。機会があれば内容を補強して、勤務校の紀要に寄稿しようかと考えている。

なお、今回のモスクワ行きの旅日記はネット上で公開しているので、関心のある方には、そちらも併せてご覧いただければ幸いです。

<http://camp.ff.tku.ac.jp/yamada-p/rem/xdia/europe/100626.html>

(やまだはるみち 東京経済大学)



音楽院の
チャイコフスキー像
© h.y.

IAML モスクワ国際大会

(2010年6月27日-7月2日)に参加して

荒川恒子

私は2003年のタリン大会を皮切りに、2004年オスロ大会、2005年ワルシャワ大会、2006年ヨーテボリ大会、2007年シドニー大会、2008年ナポリ大会、(2009年のアムステルダム大会は出席がかなわず)、本年のモスクワ大会とほぼ連続して参加させていただきました。私にとってはいずれも、このような機会でもなければ行くことはかなわぬ開催地です。大会そのものも興味深いですが、各地における生活と文化、なかならず音楽との関わりを垣間見ることができたことも、貴重な体験でした。

まず当然のことですが、ロシアに入国するにはヴィザが必要です。取得に必要な書類を集め、手続きをしている間に、遠い異国の雰囲気を感じる瞬間もありました。会議場は街中へ地下鉄に乗って20分位という便利さ。宿舎もレストランも揃っており、会議に出席するために労力はほとんどいらない快適さでした。地下鉄は轟音を発して、数分間隔で来ます。ちょっと失敬して街に繰り出すメンバー達でした。なお今回は多くの若い学生が、事務局に英語通訳として駆り出されていました。彼らにとっても、国際大会はよい経験になったことでしょう。ロシアからの出席者が多かったこともあり、英・独・仏からロシア語へ、またロシア語から英語への同時通訳をつけての会議となりました。

まずは今回の会議中、私が出席した部門に関して御紹介しておきましょう。資料をデジタル化し、閲覧に供することは当然になった今日です。今までの会では大きなコレクションがデジタル化されたこと、データがどのように入れ込まれたか、ウェブ上で如何にして閲覧できるのか等が報告の中心であったように思います。しかし今回は複数の機関が協力しあって、様々な資料を組み合わせ、音楽を学び始めた若い学生、愛好家、さらには教師が、作曲家や楽曲に関する知識を得るといった、教育面を重視したツールが開発されている報告が複数ありました。初日の発表者ギリシャはアテネの音楽図書館勤務のステファニー・メラ

コス女史に関しては、スズキ・メソードによりレッスンをされた経歴がある、との御紹介がありました。彼女を中心として、同図書館では「音楽を知る：若者のための音楽物語」と題し、高等学校や音楽院の学生へ、わかりやすい音楽導入のためのプロジェクトを立ち上げています。なおこれは身近の若者を対象としたもので、ギリシャ語で作成されています。より規模の大きいプロジェクトは、水曜日に発表された Mozart Ways です。www.mozartways.com をご覧ください。これは2002年にザルツブルクで立ち上げられたプロジェクトです。御存知の通り、モーツァルトの若い時期は、旅行に明け暮れた日々でした。そして旅先で手紙を出し、日記を書き、人々と交流し、作曲をしました。それらの資料を総合的に組み合わせ、縦横に検索できるように作成され、音楽家はもとより愛好家、また音楽好きの旅行者等が、各自のニーズに合わせて利用できるようにした便利なプログラムです。ヨーロッパ全域で行われるモーツァルト関係のイベント等も紹介されています。音楽をそれだけ切り離して享受するのではなく、様々な脈絡の中で捉えるきっかけとしても使えることでしょう。我が国でも図書館員、様々な分野の学者、音楽家等が協力して、日本の若者や音楽愛好家に文化を継承していくための仕事として、有益なページを立ち上げるのは楽しい課題ではないか……。自分が整理すべき資料が身近にはなく、利用する立場のみであった人にも、それぞれの立場で習得したものを、創造的かつ正確な情報として再構築できる課題があるのではないかと考えさせられました。

モスクワで開催ということもあり、外国におけるロシア音楽のコレクションに関する発表もありました。フランスはディアギレフ振り付けによるロシア・バレが世論を沸かせた場所です。またロシア人を母とする、偉大な音楽教師、指揮者ナディア・ブランジェの存在により、パリ・オペラ座やリヨンの高等音楽院には、まとめて20世紀初頭のロシア音楽のコレクションがあります。さらに IRCAM もロシア音楽と深い関わりを持ち、ポンピドゥ・センターで開催された「パリーモスクワ」展と、関連した演奏会シリーズに対する説明がありました。また嘗ての同胞ということもあるのかもしれませんが。ドイツからは特にドレスデンやライプツィヒの学者や図書館員が、所属図書館の資料の整

理状況を説明したり、専門家ではないがと断りつつ、経験豊かな者として、資料の保管、維持等に関わる実際的なアドバイスをされました。ロシアにある未整理の自筆譜等の現状を心配しての配慮なのかもしれません。資料研究の泰斗、ドレスデンにあるザクセン州立大学図書館の資料の整理、およびそれらを用いて多くの業績を挙げておられるオルトルン・ラントマン女史による発表も注目されます。彼女は Über das Musikerbe der Sächsischen Staatskapelle. Drei Studien zur Geschichte der Dresdner Hofkapelle und Hofoper anhand ihrer Quellenüberlieferung in der SLUB Dresden, Dresden 2009. を完成されました。これは同図書館のOPACを通してオン・ラインで閲覧できます。この業績と関連させて、1720年頃から1840年頃に渡る、ザクセン宮廷のコピストに関する研究と題して発表されました。とても多忙であった宮廷コピストには補助者がつき、彼らが浄書した楽譜を正規のコピストが点検、訂正するという方法で写譜されたそうです。ドレスデンの手書き譜の特徴は、そのまま演奏に堪える、非常に美しいものであることです。それらを画像としてネット上で見ることができます。なおドレスデンの音楽生活は、当時非常に高く評価されていました。そこで当地の楽譜は、ドイツ各地はもとより、ロンドン、マドリード、ナポリ、ヴィーン、コペンハーゲン、ストックホルム、そして多分ペテルブルクにも伝播しました。コピストの筆跡研究がオン・ライン上で閲覧できるようになったので、他の地におけるドレスデン関係楽譜の、資料研究にも助力できようという意味もあつての発表でした。

モスクワ大会の参加者の約半数はロシアの方でした。モスクワとペテルブルクに文化やそれに関わる施設等が集中している国です。しかし大きな国で様々な民族が共存していることは、言及するにおよびません。多くの資料を持つ、それぞれの勤務先の現状報告をいただきました。今回はロシアを初め、フランス、イタリア等資料を持ちすぎていて整理が追いつかない所と、何もなくて報告のしようがない場所、いずれもの明暗が浮き彫りにされた感がありました。さて嬉しいニュースをひとつ。RISMからの報告で、手書き譜が約700,000点(多くは1800年以前のもの)まとめられ、2010年6月からオン・ラインで無料閲覧できるように

なりました。http://opac.rism.info です。早速試みてみましたが、快適に情報を得られます。



Pretum Integrumのパロックコンサート © h. y.

今年のイベントとしては、コンサートが2つ企画されました。ひとつは国立図書館内の教会における、全員が古楽器をもつての演奏グループ「Pratum Integrum」によるバロック音楽です。テレマンの作品を中心にしたプログラムでした。演奏会中で、確かロシアにのみ完全な形で楽譜が残されている曲を中心に、プログラムを組んだとの解説があったかと思いません。バロック時代に、大帝への表敬訪問とか仕事を求めて、多くのイタリアやドイツの音楽家が、モスクワやペテルブルクまで遠征していたことを思い出します。もうひとつはチャイコフスキー音楽院の小ホールで開催された「ロシア・アヴェンギャルドの50年間」です。この2つの演奏会に共通しているのは、力強い圧倒的な響きです。ホールが鳴るのか、楽器それとも演奏テクニックの所以か、どこかで音を拾っているのだろうか、と見回しました。私にしては、まさに音の洪水のようで、鳴らないのも困るけれど、鳴りすぎではなかろうか等、考えこんでしまいました。それにしてもロシアの方の演奏テクニックには、本当にすばらしいものがあります。これでも最近落ちてきたとの指摘もありますが。

また図書館めぐり、午後の遠足にも面白いものがありました。図書館で中を見せていただけたのは、まず公共図書館「Alexey Petrovich Bogolyubov」です。館がその名を冠した海洋画家ボゴリュボフにより1919年に設立されたものです。彼が所有していた本、絵画

等を基礎として音楽部門にも力をいれ、いわば若者や音楽愛好家のための芸術センターといった態をなしています。特に2005年から2010年にかけては、レコード、CD、DVD等が集められました。Krylov-Jodkoによるコレクションを中心とし、18世紀後半から20世紀初頭に掲載された貴重な楽譜も揃えられています。3つのホールを持ち、年間300のコンサートをこなすとのこと。まさに大邸宅におよばれた雰囲気、昔の音楽、ロシアや外国の音楽、はたまたジャズ等まで、レクチャーや演奏を通して、若者への教育に配慮したプログラムを持っていました。しかし何と言っても圧巻は「グリニカ中央音楽博物館」です。その発端はチャイコフスキー音楽院で、そこに集められていた記録文書、自筆譜、手書き譜、楽器等を基として、1912年に「ルビンシテイン博物館」として開館されたものだそうです。1943年に国家の管理下に入り、1954年にグリニカ生誕150年を記念して、この名が冠されました。そして貴重本、楽譜、手紙、記録文書、楽器コレクション等を所有する、文化史を学ぶ機関として1980年に現在の本館が建設されました。なお分館としてA. B. Goldenweiser Memorial Apartment、N. S. Golovanov Memorial Apartment、F. I. Chaliapin Memorial Estates、S. S. Prokofiev Museum、P. I. Tchaikovsky and Moscow Museum、P. I. Tchaikovsky Culture Center、S. I. Taneyev Memorial Estate等を所有しています。世界に類を見ない規模で、という当館のパンフレットの記事には、ちょっと大袈裟な言い回しと反応しそうになりますが、このように並べられてみますと納得がいくというものです。いずれの博物館もメトロの最寄駅から歩いてわずかな所にあり、本来立地条件は悪くないはずですが、しかし渋滞する街中をバスでの移動、炎天下をものともせず、熱心に名所の説明をする引率者の言葉に耳を傾けつつの移動には、非常に時間を有しました。その結果わずかの楽器や楽譜を目にすることができたのみで、残念至極。是非もっと時間をかけて見学したいものです。まさに広大な領土、長いヨーロッパ各国との関わり、特にバロック時代には多くのヨーロッパの楽人が目指した地ということもあり、きちんと分類された楽器コレクションは目と耳を楽しませてくれました。なお説明者は、小さな不思議な機械を持参していました。そこに音源が入ってい

るのです。とても軽く便利そうな機械で、見物者の関心も集まりました。なおここでも特別展示会、演奏会、子供達のための企画等が生まれ、これらの文化遺産を後生大事に保存するというより、身近なものとして現代の生活の一環として取り入れようとの努力がなされていました。図書館では無造作にロシアの大作曲家の自筆譜を手にとることができました。もう少し時間が経つと、のどかだった昔の良き時代、という語り草になるのかもしれませんが。ひやひやししながら、ありがたく拝ませていただいた瞬間です。その他自由時間を作ってクレムリン宮殿、プーシキン美術館、トレチェコフ美術館、トルストイ博物館、プーシキン博物館等を見学しました。19世紀から20世紀初頭にかけての音楽、文学の厚い層を目の当たりにする思いでした。この他にも多くの音楽家、文学者を記念する博物館があります。少なくとも私が見学できたものに共通していたことは、博物館は大切な記念品の保管、維持の場所ということから数歩前進し、それらの品が置かれるに相応しい空間を作り上げているということです。彼らが昔住んでいた場所なら、当時を髣髴とさせるような維持、再現は当然かもしれません。しかしまったく新しい建物であっても、品物を単に破損を防ぎつつ見学させるということ以上のことを考えていることが感じられました。作家にお目にかかり、その作品を朗読してくださるのに耳を傾ける、音楽家ならば、お茶にお招きくださり、演奏を聴かせていただけるような雰囲気なのです。また街にはボリショイ劇場、マールイ劇場を初め、歩いていけばすぐに由緒ある場にぶつかるといった具合に、劇場が沢山あります。特にボリショイ劇場の裏手には、多くのカフェやレストランが並び、演劇シーズンでもないのに、若い方で夜遅くまで賑わっています。でも入るために行列ができてるのはディスコでした。いずこの国、街でも若者の関心事は同様のようです。週末ともなれば、着飾って遊びに行く人たちが地下鉄は溢れています。モスクワっちは随分お洒落です。音楽、演劇、バレ等を鑑賞するために出かけることが、日常生活になっているようで、うらやましい限りでした。きっとこれらの文化や生活スタイルを生み出す根底には、長い厳しい冬があるのではないか、是非次には冬に訪れてみたいとおもいました。

フェアウェル・パーティの席では、今まで顔も名前

も知らないでお世話になっていた、ドイツやスウェーデンの図書館員と隣り合わせになり、共にダンスを楽しみ、親しさが増しました。今まで長い間、楽しみながらも、自分の居場所を見出しにくく、緊張したり、ちょっと居心地の悪い思いもしていた IAML 国際大会でした。しかし少しは自分と IAML の関係が見えてきたようです。来年はアイルランドのダブリンでの開催。また来年という言葉で、皆様とお別れしました。

(あらかわつねこ 山梨大学)



モスクワ音楽院小ホール現代音楽コンサート © h.y.

第48回 IAML 支部研究例会報告

平成21年度文化庁委託業務「音楽情報・資料の収集及び活用に関する調査研究」

「日本の音楽資料」のデータベース化のための調査

1. 発表者：調査委員長・久保田慶一（日本音楽学会）
平成21年度文化庁委託業務として行った上記の調査研究についての報告。

(1) これまでの経緯

・平成14年7月：音楽図書館協議会（専門・公共図書館部会）は、全国の関係機関が所属する「音楽コレクション」を調査し、「日本の音楽コレクション」を発行し、内外の関係機関ならびに研究者に貴重な情報を提供した。

・平成17年：日本音楽学会第56回全国大会において、シンポジウム「日本の音楽資料—収集・整理と研究」

を開催し、多岐にわたる日本の音楽資料の収集・整理の現状についての問題を提起した。

・平成 19 年 9 月：日本音楽学会は「日本の音楽資料」の収集ならびに活用を検討するワーキンググループを設置した。同年 10 月の総会において、ワーキンググループは、関連機関との連携協力と学会としての活動ならびに資金面での援助を提言した。

・平成 19 年 11 月：国際音楽資料情報協会日本支部、日本音楽学会（関東支部）、音楽図書館協議会共催によるシンポジウム「日本の音楽資料・情報を考える」が開催された。

・平成 20 年 10 月：日本音楽学会は総会において、音楽図書館協議会ならびに国際音楽資料情報協会日本支部の機関と協力して、「日本の音楽資料」調査委員会の設置を決める。

・平成 21 年 4 月：「日本の音楽資料」調査委員会の活動を開始する。

・平成 21 年 7 月：文化庁より委託業務を受託する。調査開始。

・平成 22 年 3 月；調査終了。調査報告書の発行。

(2) 調査の概要

・調査対象とした音楽資料

- ① 日本人作曲家の手稿譜
- ② 1945 年以前に我が国で出版された楽譜
- ③ 西洋音楽の手稿譜
- ④ 1900 年以前に外国で出版された楽譜

・第 1 次調査：上記 4 種類の資料についての、所蔵の有無やおおよその点数、そして目録化されているかを調査した。

・第 2 次調査では、資料が目録化されている場合には、目録からのデータ記載、OPAC からの記載、さらに統一項目によるフォーマットへの記載を実施した。また十分な書誌情報を得られない場合は、委員や調査員が現地に赴いて調査を行った。

(3) 調査結果の概要

・第 1 次調査：全国 475 機関を対象とし、354 機関から回答を得た。

・第 2 次調査：全国 160 機関において、20,807 点の音楽資料に関する書誌データを収集・整理した。

作曲家名	冊数
下總皖一	1,121
永井幸次	1,069
小松耕輔	511
大澤壽人	274
井上武士	155
團伊玖磨	104
高田三郎	62
渡鏡子	39
山田耕筰	20
大栗裕	20
総計	3,375

日本人作曲家の手稿譜
(上位 10 位まで)

出版譜	年代	冊数
我が国で出版された楽譜	明治期以前	8
	明治期	1,636
	大正期	1,367
	昭和期	3,808
	不明	119
欧米で出版された楽譜	1800 年以前	528
	1870 年まで	2,317
	1900 年まで	477
	総計	10,260

出版譜の調査における出版年代別状況

(4) 今後の課題

- ・ 調査データの精査と各データ間の統一、統合、整合性のための作業。
- ・ 資料の公表・公開をためらう機関の説得や未調査機関への働きかけ。
- ・ ミュージック・ライブラリアンの養成。少なくとも図書館司書の訓練。
- ・ 資料データの公開。

2. 発表者：調査員・寺本まり子（国際音楽資料情報協会日本支部）

・関係大学図書館との連絡調整にあたったが、音楽資料が公共物であるのか、私有物であるのかという、解決が難しい問題に直面した。

・多くの図書館でアウトソーシングが導入され、調査を依頼しても担当してもらえない場合があった。

- ・単年度の調査だけでは、現状を反映した結果を得ることができない。継続的な調査が必要である。
- ・調査結果の公開が望まれる。

3. 発表者：調査員・林淑姫（音楽図書館協議会）

- ・今回の調査の目的は、まずは日本の音楽資料の現況を把握することであった。時間が制約されているなかで、データを提供してくださった関係機関、担当者の方々に感謝している。
- ・①日本人作曲家の手稿譜と②1945年以前に我が国で出版された楽譜に関して、問題や課題が多い。目録法の不備もあり、また楽譜目録担当者の能力も問われる。
- ・調査票はできるだけ簡便にしたが、それでも正確な記入がされていない場合が多かった。
- ・時間の制限もあり、集積データの整備が行き届かなかったことを残念に思っている。
- ・今回の調査で明らかになった資料は、ごく一部であり、今後も継続的な調査が必要である。

4. 発表者：調査員・長谷川由美子（音楽図書館協議会）

- ・西洋の楽譜について、多くの図書館員がプレート番号についての知識がなかった。
- ・日本の楽譜資料に関する参考図書が少なく苦労した。
- ・遺族から寄贈された楽譜類が未整理のままである。

5. 発表者：調査員・岸本宏子（国際音楽資料情報協会日本支部）

- ・今回のデータ収集が無駄なく次世代の人々に引き継がれることが望まれる。
- ・若い研究者の方々の良心的な作業をしていただいた。
- ・若い研究者の方々に音楽図書館の特殊性を理解していただけてよかった。
- ・公共図書館から専門研究図書館まで、様々なタイプの図書館が対象であったので、対応に苦労した。
- ・過去に行われた調査が継承されないまま繰り返し行われたことがわかった。行った調査は必ず何らかの形で継承されることが望まれる。
- ・今回の調査で、将来に向けての端緒が開かれたことはよかった。

6. 主な質疑応答

Q：作曲家の自筆譜については演奏団体が所有していることが多いので、今後、演奏団体との協力体制の構築が必要ではないか。

A：最近では作曲家が自筆譜を所有して、演奏団体はコピーだけを所有する場合が多い。また演奏団体が所有していても資料として利用できるには、著作権などの処理が必要であるが、演奏団体にはこうした業務をする余裕はないというのが現状である。

Q：調査対象はどのようにして決めたのか。

A：調査委員会の発足にあたって、調査対象は日本にある音楽資料とすることは決まっていた。しかし当初は西洋音楽関連の資料が中心であってが、文化庁委託業務では、日本人作曲家と日本で出版された楽譜を主たる対象とした。調査結果においても、後者の資料が圧倒的に多くデータ化することができた。ただし、調査対象を広げすぎた感もあり、調査にあたっては音楽図書館学の専門家の増員をはかるべきであった。

Q：今後、どのように調査データを活用していくのか。

A：調査結果のデータ資料の知的財産権は文化庁にある。またデータを公開するには、再度の確認作業が必要であることは伝えてある。今後、継続した調査が望まれる。

Q：今回の調査データが全体の状況を反映しているのか。

A：特定の図書館が資料データを提供しているかに、データ数は依存している。従って今回の調査結果は暫定的なものになっている。

文責：久保田慶一

（くぼたけいいち 日本音楽学会
「日本の音楽資料」調査委員長）



事務局だより



■ 2011 年度会費納入のお願い（会計）

振込先

<ゆうちょ銀行>

00130-5-75629 IAML 日本支部

<三菱東京 UFJ 銀行>

六本木支店

普通 1089206

IAML 日本支部 (イアムエルホンゾフ)

代表 森佳子

ご連絡先に変更がある場合は、併せて下記までお知らせ下さい。

IAML 日本支部会計担当 森佳子

■ 2011 年は支部改選の年です。

3 年間役員として IAML に関わってみようと思われる会員の自薦他薦が期待されます。

■ 本部メーリングリスト・ヘッドライン

オランダ放送交響楽団、合唱団、図書館、教育プログラムを包括しているネザーランド放送音楽センター (NBMC) が、9 月に連立政権を立てた極右派を含むオランダ新政府によって、突如閉鎖宣告されるといショックなニュースがオランダ支部より飛び込んできました。前会長 M. セヴェールが所属する図書館がその対象となっていることもあり、新会長から、署名とメッセージを、と呼びかけがありました。支部から、会長宛に遺憾の意を伝えております。ニュースの詳細は、以下をご覧ください。このサイトから個々にメッセージを貼り付けることもできます。

http://www.mco.nl/mco_page/actie

※本部電子ニューズレターも参照

* * * * *

* * * * *

■ 秋の研究例会企画中

「日本におけるポピュラー音楽」

講師： 山田晴通 氏

日時： 12 月 5 日（日） 13:30 ~ 17:00

場所： 東京音大図書館 5 F コンピューター教室

※HP で最新情報更新

■ 会員の活動情報

会員の活動情報をお寄せください。自己申告を含め、ご協力いただけると幸いです。

■ 新ニューズレター担当

今号より柳原和音さんにニューズレターを担当していただくことになりました。会員として、音楽ライブラリアンとしても期待の新人です。

■ 事務局への連絡

IAML 日本支部事務局は、現在下記の奥付住所を連絡先としております。お急ぎのご連絡は下記事務局長代行に直接お知らせ下さいませようお願い致します。

事務局長代行：藤堂

>>> Postscript <<<

IAML に入会して約 4 ヶ月、この号が初仕事となります。多くの方々に助けられながらようやく発行までこぎつけることができました。藤堂さん、末永さん、また、寄稿者の皆様、本当にありがとうございました。これからも何かとご迷惑をおかけすることもあるかと思いますが、できる限り精進して参りますので、ご指導のほどよろしくお願い申し上げます。（柳原）

Newsletter 第 40 号

国際音楽資料情報協会 (IAML) 日本支部

2010 年 11 月 15 日発行

〒150-0046 東京都渋谷区松涛 藤堂気付

<http://www.iaml.jp>